子どもの意識に対する母親の働き方の影響の再検討

三　輪　　哲*
青　山　祐　季**

本稿の目的は，母親の就業が子どもの意識に与える影響を実証的に検証することである。全国の14～15歳の子どもとその母親のペアデータを使用し，構造方程式モデルによる実証分析を行なった。また，母親の働き方が子どもの意識に与える影響だけでなく，養育行動や接する時間の媒介効果についても検討した。

その結果，(1) 母親の働き方によって，子どもの意識に負の影響をもたらすこと，(2) 職業生活充足イメージに対する母親の就業の効果は，女子においてのみみられること，(3) 私生活充足イメージに対する母親の就業の効果は，男子においてのみみられることがわかった。また，(4) 養育行動の中でも，情緒的サポートが子どもの意識に与える効果は強いこと，および (5) 接する時間は，女子の職業生活充足イメージにのみ影響を与えることも明らかにされた。

これらの結果から，子どもの性別によるロールモデルとしての母親の意味の違いと，情緒的サポートと接する時間により子どもの意識が向上する可能性が示唆された。

キーワード：母親の働き方，子どもの意識，役割過重仮説

1　はじめに

女性の就業が拡大してきている。総務省「労働力調査特別調査」によると，昭和55年の共働き世帯は614万世帯，専業主婦世帯は1114万世帯であり，専業主婦世帯が圧倒的に多かった。1990年代に入るとその数は拮抗し，2000年代から現在にかけて，専業主婦世帯よりも共働き世帯の方が多くなっている。平成24年の総務省「労働力調査」によると，共働き世帯が1054万世帯，専業主婦世帯が787万世帯であり，その逆転現象が生じている。

一方で，厚生労働省の「21世紀成年者縦断調査」によると，平成14年から平成23年にかけて，第1子出産時に就業継続している女性は32.8％であり，残りの約7割の女性は，結婚や出産を機に仕事をやめてしまうという現実がある。この数字が示すことは，多くの女性にとって「働くこと」と「家庭をもつこと」が，事実上，相互排他的な選択であるということである。

もちろん，「働くこと」と「家庭をもつこと」の両方を同時に選択することも可能ではある。だが，

*教育学研究科　准教授
**教育学研究科　博士課程前期

いざそうするとなると，女性にとって，家事や子育てなどの家庭における負担は，過剰なまでに大きくなりがちである。Hochshild（1997 = 2012）は，働く母親たちは，仕事も，家庭も，そして子どもへの対応までもこなさなくてはならず，負担が非常に大きいことを指摘している。

女性は，男性が中心を担ってきた労働市場に流入することに成功はしたが，その放棄できない家族責任を抱いたままである。放棄できない家族責任の中でも，子育ては女性にとって大きな課題である。実際に，6歳未満の子どもの有無，有業・無業によって妻の生活時間は全く異なり，最も忙しいのは，有業で6歳未満の子どもをもつ妻であるという報告もある（菅原 1991）。

そうした現実のもとで，母親の働き方は，子どもの意識にいかなる影響を及ぼしうるのだろうか。この研究課題自体は，決して目新しいものではない。かねてより，共働きの家庭は子どもの非行をうむという議論もあり（樋口 1984），母親の就業が子どもに悪影響を与えないか，といった問題関心から，母親の就業が子どもに与える影響についての研究がなされてきた（原 1987）。この分野に関して国内外の先行研究を包括的に検討した研究に，末盛（2005）がある。それによれば，子どものどの発達段階においても，明確に母親の就業が子どもへ影響を与えているとは言えないとして，統一的な見解が得られていない状況を認めている。ただし，個別の実証研究に眼を向ければ，子どもの意識や行動に対して母親就業の影響がみられるとする知見もある（例えば，菅 2009; Kawaguchi and Miyazaki 2009; Tanaka 2008など）。つまり，この研究課題に関する論争はいまだ終止符が打たれておらず，さらなる研究の余地がある。

重要なことに，子どもの意識に対する母親就業の影響はみられないとする知見が多数を占める。この点では，先行研究の知見はほぼ一貫している。しかし，これまで検証されたもののなかに，子どもが抱く職業生活と私生活に関する将来のイメージを扱っているものがほとんどないことには注意を要する。なぜなら，それら2つは，潜在的にその後の人生にかかわる意思決定の規定因となりうるものといえ，社会学的に重要性が高いと考えられるからだ。さらに言えば，働くことと家庭をもつこととの葛藤とに直接結びつくものとして次代を担う世代の意識をとらえることが、社会のゆくえを知るうえでも肝要であるし，そこにみられる母親就業の影響という焦点には，現代社会と近未来社会をつなぐ重要な結節点としての意味が秘められているからである。

そこで本稿では，子どもの意識として，彼女ないし彼らの将来の職業生活充足イメージと私生活充足イメージをとりあげる。そして，それら子どもの意識に対する母親就業による効果を実証的に検証することを目的とする。良質な全国規模の社会調査データの分析から，母親の就業選択や，養育行動，子どもとの接触時間が，子どもの意識へといかに影響するのか，検討していきたい。

2　既存研究の整理

ところで，子どもに対する母親就業の影響について，統一的な見解が得られていないことは既に述べた。ここでは，既存研究のうち主要なものを，扱う領域ごとに概観してみよう。

まず，ポジティブな結果がうかがえるのは，成人を対象として仕事あるいは就業にかかわる領域の分析をした研究である。母親の就業が女性のフルタイム就業を促すとする研究成果や（Tanaka

2008），母親就業により男性の性別役割分業意識が低められ，そうした対象者の配偶者就業率もまた高まるという知見が明らかにされた（Kawaguchi and Miyazaki 2009）。

しかし，教育にかかわる領域の知見には，どちらかといえばネガティブなものが散見される。ここでは，学校における成績や問題行動，そしてそれらの帰結たる教育達成に対して，母親就業が及ぼす影響についての研究成果を整理しよう。成績にかんしては，中学生を対象に効果がないとする知見もあれば（菅 2009），小学生を対象としてパートタイム就業の負の効果を指摘するものもある（吉本ほか 1996）。問題行動についてみたものでは，中学生において母親就業の正の効果を報告するものと（菅 2009），小学校段階では効果を見出せなかった研究とが存在する（Cooksey et al. 1997）。そして，教育達成については成人対象の調査データ分析に基づき，母親就業の負の効果を指摘するものもあれば（Tanaka 2008），無効果とするものもある（菅 2009）。いずれも知見は分かれているものの，母親の就業が，教育において有利に働くという証拠は得られていないことが注目できる。

子ども期の意識・態度的側面に対して母親就業が及ぼす影響については，それがみられないと主張する研究がほとんどである。小学校やそれ未満の発達段階においては，多くの実証研究にて母就業の効果がないことが論じられている。母親就業によって幼児の生活習慣の自立が低まるとする長津（1990）を例外として，幼児の情動特性（要田 1982），小学生の性格（兵庫県家庭問題研究所 1986），自尊心（Cooksey et al. 1997），自立心（長津 1982）などについて，母親の就業状態と関連がないとされた。さらに中学生の調査データを分析した末盛（2002）では，就業の継続まで考慮すると結果は異なるものの，単に就業状態の違いのみで比較したときには，子どもの独立心に差がないことが明らかにされた。これらから，どの発達段階においても，意識・態度的側面に対する母親就業の影響を見出すのは困難であることがわかる。

しかしながら，従属変数とされたもののなかに，職業にかかわる意識項目がないことには注意を要する。それというのも，母親の就業の影響をみるのなら，就業ないし職業にかかわる意識において顕現するとみるのが自然だからである。さらにまた，職業にかかわる意識は，家庭を含む私生活にかかわる意識と対にして検討することが望ましいと考える。なぜなら，それらを同時に検討することで初めて，子どもがもつ「働くこと」と「家庭をもつこと」の葛藤や選択の問題を扱えるようになるからである。

本稿は，職業生活充実イメージと私生活充実イメージという2つの意識変数を従属変数に用いて，改めて母親の就業や働き方との関連を検討していくものである。

3　仮説

末盛（2005）の整理によれば，母親の就業が子どもに与える影響についての社会学的理論は，相反する2つの説に分類される。第1の説は，役割過重仮説である。これは，仕事と家庭という2重の役割を母親が担うことによって，役割負担が過大になり，子育てに悪影響を及ぼすという仮説である。それに対して，第2の説は，役割増大仮説である。こちらは，母親が就業することで，母親自身の家

庭と仕事の両方の役割におけるアイデンティティが累積され，その心理的な安定が子どもに良い影響をもたらすとみる仮説である。これらは論理的に排反であって，正反対の予測を導く。

本稿では，少なくとも現代日本においては，役割過重仮説があてはまるのではないかとの立場をとる。それというのも，日本の母親にとって「働くこと」と「家庭をもつこと」の両立が困難である状況からうかがえる姿が，役割過重仮説の描く世界像と一致するように思われるからだ。もし役割過重仮説が正しければ，役割が過重になった既婚女性就業者たちは母親としての役割を十分にこなせなくなり，子どもが抱く将来の自身の姿のイメージは明るくないものになる。すなわち，次の命題が観察されるだろう。

命題1a: 母親が就業している場合，子どもの職業生活充実イメージは低くなる。
命題1b: 母親が就業している場合，子どもの私生活充実イメージは低くなる。

仮に，母親就業と子どもの意識とが予測通りの向きの関連があったとして，それはどのように説明されるのだろうか。ここで注目するのは，母親と子どもとの関わりである。関わり方のいわば「質的」な側面をとらえるものに，養育行動がある。末盛（2002）は，子どもの独立心に対して，母親の養育行動が正の効果を及ぼすことを見出した。それを参考にすると，母親の就業によって養育行動が減少し，さらにその減少が子どもの将来イメージの低下へとつながるかもしれない。すると，以下の命題が観察されるはずである。

命題2a: 母親就業が養育行動を減少させるので，子どもの職業生活充実イメージは低くなる。
命題2b: 母親就業が養育行動を減少させるので，子どもの私生活充実イメージは低くなる。

同じく母子の関わりに注目するのでも，その「量的」な側面をとらえることもできる。すなわち，母親と子どもとが接した時間を測って，関わりの量的指標とするのである。こちらは，働く母親たちが，「時間的な板挟み状態」に置かれていることを指摘する，Hochshild（1997）の主張と重なる。つまり，就業している母親のもとで育つ子どもは，母と接する時間が量的に少ないがゆえに，自身の将来のイメージを明るく保つことができない。これが正しければ，次の命題が観察されよう。

命題3a: 母親就業が接する時間を減少させるので，子どもの職業生活充実イメージは低くなる。
命題3b: 母親就業が接する時間を減少させるので，子どもの私生活充実イメージは低くなる。

これまでに述べた3つの命題を中心に，以下，実証分析を進める。

4　データと変数

⑴データ

本稿の実証分析で用いるデータは，2011年に内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室が実施した，「親と子の生活意識に関する調査」データである。このデータの調査対象は，全国の14～15歳の中学3年生の子どもとその保護者である。標本規模は4000人，子調査の有効回収数は3192票（79.8%），保護者調査の有効回収数は3197票（79.9%）である。本稿では，保護者を子どもの実母に限定する。実母の有効回収数は2711票であった。本稿では，欠損データを除いた有効ケース数N=2428を実証分析に使用する[1)]。

⑵変数

「母親の働き方」としては，次の4カテゴリーへと回答をまとめた。「1　フルタイム：正規の職員・従業員／会社・団体等の役員」，「2　パートタイム：パート・アルバイト／契約社員・嘱託／派遣社員」，「3　自営業：自営業主／家族従事者／家庭での内職など／その他」，そして「4　専業主婦・無職」である。それから「専業主婦・無職」を基準とした，ダミー変数を作成して使用した。

子どもの意識として，「職業生活充足イメージ」と「私生活充足イメージ」の2つの潜在変数を構成した。これらは，「あなたが40歳くらいになったとき，次のようなことをしていると思いますか。」という質問群の中の「社会的に高い地位についている」，「世の中の役に立つ仕事をしている」，「やりがいを感じる仕事をしている」の3つの項目が職業生活充足イメージを測定し，「結婚している」，「子どもを育てている」，「仕事以外の仲間や友人とも親しくつきあっている」の3つの項目が私生活充足イメージを測定するように，測定方程式を示すパスがひかれる。また，これらの顕在変数は全て「そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない」の4件法でたずねられている。

母親の養育行動として，「民主的育成」，「情緒的サポート」，「厳格的統制」の3つの潜在変数を使用した。「民主的育成」には，母親に対する「あなたは，お子さんの教育にあたって，どのようなことを重視されていますか。」という問いの「目標をたてて努力すること」「自分の意見をはっきり言えること」「自立して考えること」の3つの顕在変数へとパスをひいた。「情緒的サポート」には，子どもに対する「お母さんについてどのように思っていますか。」という問いの「私のことをよくわかっている」，「私にいろいろなことを話してくれる」，「私は，父や母の仕事（家事を含む）についてよく知っている」の3つの顕在変数へとパスをひいた。同様に，「厳格的統制」については，「私に対して厳しくないほうだ」，「私のことを扱いにくいと感じていない」，「私の勉強や成績についてうるさく言わないほうだ」の3つの顕在変数へとパスがひかれる[2)]。

子どもと接する時間として，保護者調査から，「あなたが，平日にお子さんと一緒に何かしたり，相手をしている時間は，平均するとだいたいどれくらいになりますか。」という問いに対する，「0分～15分未満/15分～30分未満/30分～1時間未満/1時間～2時間未満/2時間～3時間未満/3時間～4時間未満/4時間以上」の回答を，それぞれ「0.25/ 0.5 /1 /2 /3 /4 /5（時間）」へと変換した。

統制変数として，「母親の年齢」「父親の年齢」「「母親の教育年数」「父親の教育年数」「世帯収入」「きょうだい数」を使用した。

「母親の教育年数」と「父親の教育年数」は，9年（中学校）から18年（大学院）の値をとる変数にそれぞれ変換した。「世帯収入」は，「あなたの世帯の収入をすべて合計すると，去年1年間において，税込ではおよそいくらくらいになりますか。」という問いに対する，「100万円未満 /100万円～ 200万円未満 /200万円～ 250万円未満 /…（中略）…/850万円～ 1000万円未満 /1000万円～ 1200万円未満 /1200万円以上」という回答について，それぞれ中間値をとったうえで，自然対数変換したものを使用する。「きょうだい数」は一人っ子が0，ふたりきょうだいが1…というように，回答者を除いたきょうだいの人数を示すものとして用いた。

5　分析結果

まず，これら本稿の分析で使用する変数の記述統計量を，次の表1にまとめた。中学3年生の母親とあってか，パートタイムで働いている母親は全体の半数にのぼる。続いて専業主婦（24%），フルタイム（19%）と続く。

従属変数となる，「職業生活充足イメージ」と「私生活充足イメージ」を測定するための顕在変数をみると，高い地位についているとイメージするもののみ平均値が低いが，後のものは概ね高い。

表1　記述統計量（N=2428）

	Mean	S.D.	Min	Max
母親の働き方（ref：専業主婦）				
フルタイム	0.19	0.39	0.00	1.00
パートタイム	0.50	0.50	0.00	1.00
自営業	0.07	0.26	0.00	1.00
子どもの意識				
社会的に高い地位についている	2.15	0.84	1.00	4.00
世の中の役に立つ仕事をしている	2.79	0.83	1.00	4.00
やりがいを感じる仕事をしている	3.16	0.82	1.00	4.00
結婚している	3.12	0.91	1.00	4.00
子どもを育てている	3.04	0.94	1.00	4.00
仕事以外の仲間や友人とも親しくつきあっている	3.48	0.71	1.00	4.00
母親の養育行動				
目標をたてて努力すること	3.15	0.73	1.00	4.00
自分の意見をはっきり言えること	3.13	0.71	1.00	4.00
自立して考えること	3.12	0.75	1.00	4.00

（表1　続き）

	Mean	S.D.	Min	Max
私のことをよくわかっている	3.09	0.86	1.00	4.00
私にいろいろなことを話してくれる	3.01	0.87	1.00	4.00
私は父や母の仕事についてよく知っている	3.09	0.90	1.00	4.00
私に対して厳しくないほうだ	2.46	0.94	1.00	4.00
私のことを扱いにくいと感じていない	3.06	0.93	1.00	4.00
私の勉強や成績についてうるさく言わないほうだ	2.29	1.05	1.00	4.00
接する時間	2.15	1.35	0.25	5.00
母親の年齢	44.14	4.38	30.00	59.00
父親の年齢	46.75	5.02	27.00	71.00
母親の教育年数	13.36	1.53	9.00	18.00
父親の教育年数	13.90	2.13	9.00	18.00
収入[1)]	6.24	0.66	3.91	7.17
きょうだい数	2.38	0.84	1.00	8.00

注1）回答カテゴリーの中間値を割り当てたうえで，対数変換を行っている。

次に，表2から，構造方程式モデルの分析結果を確認しよう。model1は母親の働き方の効果に注目したモデル，model2は養育行動を媒介するモデル，model3は子どもと接する時間を媒介，そしてmodel4はそれら両者とも媒介するようモデル設定をしている。

表2　職業生活および私生活についての充足イメージに関する多重指標モデルの結果（N=2428）

	model1	model2	model3	model4
職業生活充足イメージ←				
母親　フルタイム	-0.054 †	-0.053	-0.051	-0.052
母親　パートタイム	-0.056 *	-0.057 *	-0.054 *	-0.056 *
母親　自営業	-0.065	-0.098 *	-0.062	-0.096 *
母親の年齢	-0.002	0.000	-0.002	0.000
父親の年齢	0.000	-0.001	0.000	-0.001
母親の教育年数	-0.009	-0.010	-0.009	-0.010
父親の教育年数	0.011 *	0.011 †	0.012 *	0.011 †
収入	-0.027	-0.022	-0.027	-0.022
きょうだい数	0.016	0.023 †	0.017	0.024 †
母親の養育行動				
民主的育成		0.034		0.033

（表2　続き）

	model1	model2	model3	model4
情緒的サポート		0.344 ***		0.343 ***
厳格的統制		-0.026		-0.027
接する時間			0.009	0.006
私生活充足イメージ←				
母親　フルタイム	-0.109 †	-0.110 †	-0.110 †	-0.111 *
母親　パートタイム	-0.038	-0.035	-0.039	-0.036
母親　自営業	-0.020	-0.062	-0.020	-0.063
母親の年齢	-0.013 *	-0.011 *	-0.013 *	-0.011 *
父親の年齢	0.000	0.000	0.000	0.000
母親の教育年数	0.006	0.004	0.006	0.004
父親の教育年数	0.017	0.015	0.017	0.015
収入	-0.005	-0.001	-0.005	-0.001
きょうだい数	0.037 †	0.048 *	0.037 †	0.047 *
母親の養育行動				
民主的育成		0.061		0.062
情緒的サポート		0.501 ***		0.502 ***
厳格的統制		-0.021		-0.021
接する時間			-0.001	-0.004
民主的育成←				
母親　フルタイム		0.046 †		0.046 †
母親　パートタイム		0.000		0.000
母親　自営業		-0.027		-0.027
情緒的サポート←				
母親　フルタイム		-0.017		-0.017
母親　パートタイム		-0.005		-0.005
母親　自営業		0.082		0.082
厳格的統制←				
母親　フルタイム		-0.015		-0.015
母親　パートタイム		-0.041		-0.041
母親　自営業		-0.163 *		-0.163 *
接する時間←				
母親　フルタイム			-0.262 **	-0.262 **
母親　パートタイム			-0.188 **	-0.188 **
母親　自営業			-0.276 *	-0.276 *
←職業生活充足イメージ				
社会的に高い地位についている	1.000	1.000	1.000	1.000
世の中の役に立つ仕事をしている	1.605 ***	1.508 ***	1.606 ***	1.508 ***

（表2　続き）

	model1	model2	model3	model4
やりがいを感じる仕事をしている	1.067 ***	1.088 ***	1.066 ***	1.088 ***
←私生活充足イメージ				
結婚している	1.000	1.000	1.000	1.000
子どもを育てている	0.962 ***	0.982 ***	0.961 ***	0.982 ***
仕事以外の仲間や友人とも親しくつきあっている	0.373 ***	0.381 ***	0.373 ***	0.380 ***
←民主的育成				
目標をたてて努力すること		1.000		1.000
自分の意見をはっきり言えること		1.507 ***		1.507 ***
自立して考えること		1.484 ***		1.484 ***
←情緒的サポート				
私のことをよくわかっている		1.000		1.000
私にいろいろなことを話してくれる		1.178 ***		1.178 ***
私は父や母の仕事についてよく知っている		0.924 ***		0.924 ***
←厳格的統制				
私に対して厳しくないほうだ		1.000		1.000
私のことを扱いにくいと感じていない		0.407 ***		0.407 ***
私の勉強や成績についてうるさく言わないほうだ		1.006 ***		1.006 ***
RMSEA	0.060	0.037	0.055	0.036
CFI	0.923	0.926	0.920	0.923
TLI	0.882	0.910	0.881	0.906

注：*** $p < .001$　** $p < .01$　* $p < .05$　† $p < .10$　（両側検定）

model1から，職業生活充足イメージに対して，母親がパートタイムであると5％水準で，フルタイムであると10％水準で有意に負の効果があることがわかった。つまり，専業主婦の母親をもつ子どもに比べて，フルタイムやパートタイムの母親をもつ子どものほうが，職業生活充足イメージが低い傾向がある。

また，私生活充足イメージに対して，母親がフルタイムであると10％水準で有意に負の効果があることがわかった。つまり，専業主婦の母親をもつ子どもに比べて，フルタイムの母親をもつ子どものほうが，私生活充足イメージが低い傾向がある。

model2では，養育行動変数を投入した。母親がフルタイムであると，民主的育成に10％水準で有意に正の効果があり，母親が自営業であると，厳格的統制に有意に負の効果があることがわかった。職業生活充足イメージに対しても，私生活充足イメージに対しても，養育行動の中の情緒的サポートが1％水準で有意に正の効果があることが分かった。また，職業生活充足イメージに与える効果は0.344であり，私生活充足イメージに与える効果は0.501であり，情緒的サポートの効果は，私生活充足イメージの方が大きいことがいえる。

また，職業生活充足イメージに対して，母親が自営業であると5％水準で有意に負の効果をもつ

ことがわかった。これは，情緒的サポートを投入したことによって現れた，擬似無相関である。有意ではないが，母親が自営業であると情緒的サポートに0.082の正の効果を持っている。すなわち，自営業の母親のほうが情緒的サポートをしやすく，また，情緒的サポートが子どもの職業生活充足イメージに正の影響をもたらすということがわかる。そのため，情緒的サポートを介さなければ，自営業の母親は職業生活充足イメージに負の影響をもつ。

以上から，母親の就業の効果が養育行動によって媒介されることはないが，情緒的サポートが子どもの意識に与える効果が有意に強い効果を与えること，母親が自営業である場合有意な効果が表れることがわかった。

model3では，接する時間を投入した。母親がフルタイム・パートタイムであると，接する時間は1%水準で有意に負の効果があり，母親が自営業であると，5%水準で有意に負の効果があることがわかった。すなわち，働き方にかかわらず，働いている母親は，専業主婦の母親に比べて，子どもと接する時間が少ない傾向にある。

一方で，職業生活充足イメージも私生活充足イメージも，子どもの意識に対する母親の就業の効果は，model1の時とほとんど変わらず，直接効果も媒介効果もみられなかった。

model4は，養育行動と接する時間を投入したものである。この結果は，model1からmodel3までとほとんど変わらない。

以上の結果から，①母親の就業は子どもの意識に効果をもつ，②その効果は，母親の働き方や子どもの意識の種類によって違う，③情緒的サポートが子どもの意識に有意に正の効果をもつ，④母親の就業は，接する時間を少なくするが，子どもの意識には媒介効果も直接効果も与えない，ということがいえる。

表3　職業生活および私生活についての充足イメージに関する規定メカニズムの男女差（男子 N=1267, 女子 N=1161）

	model1		model2		model3		model4	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
職業生活充足イメージ←								
母親　フルタイム	-0.067	-0.050	-0.079	-0.041	-0.067	-0.043	-0.080	-0.035
母親　パートタイム	-0.045	-0.066 *	-0.052	-0.067 *	-0.045	-0.062 †	-0.052	-0.063 †
母親　自営業	0.000	-0.110 *	-0.047	-0.132 *	0.000	-0.104 †	-0.048	-0.127 *
母親の年齢	-0.004	0.002	-0.001	0.002	-0.004	0.002	-0.001	0.002
父親の年齢	-0.001	-0.001	-0.002	0.000	-0.001	0.000	-0.002	0.000
母親の教育年数	-0.006	-0.014	-0.002	-0.018 †	-0.006	-0.014	-0.003	-0.018 †
父親の教育年数	0.023 **	0.000	0.022 **	0.000	0.023 **	0.001	0.022 *	0.000
収入	-0.047	0.002	-0.043	0.009	-0.047	0.002	-0.043	0.009
きょうだい数	0.030	0.011	0.041 *	0.018	0.030	0.014	0.041 *	0.021
母親の養育行動								
民主的育成			0.003	0.053			0.003	0.050
情緒的サポート			0.371 ***	0.361 ***			0.371 ***	0.360 ***
厳格的統制			-0.019	-0.032			-0.019	-0.033
接する時間					-0.002	0.021 *	-0.003	0.018 †
私生活充足イメージ←								
母親　フルタイム	-0.167 *	-0.046	-0.186 *	-0.038	-0.165 *	-0.048	-0.185 *	-0.041
母親　パートタイム	-0.121 †	0.056	-0.121 *	0.055	-0.119 †	0.053	-0.120 †	0.052
母親　自営業	0.028	-0.073	-0.028	-0.105	0.031	-0.077	-0.027	-0.109
母親の年齢	-0.011	-0.015 †	-0.007	-0.016 *	-0.011	-0.015 †	-0.007	-0.016 *
父親の年齢	-0.005	0.005	-0.007	0.006	-0.005	0.004	-0.007	0.006
母親の教育年数	0.023	-0.009	0.025	-0.011	0.023	-0.009	0.025	-0.011
父親の教育年数	0.016	0.015	0.015	0.011	0.017	0.014	0.016	0.011

（表3　続き）

	model1		model2		model3		model4	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
収入	-0.033	0.030	-0.025	0.035	-0.033	0.030	-0.025	0.035
きょうだい数	0.030	0.041	0.051 †	0.046	0.031	0.040	0.052 †	0.045
母親の養育行動								
民主的育成			0.117	0.014			0.116	0.015
情緒的サポート			0.563 ***	0.446 ***			0.563 ***	0.447 ***
厳格的統制			0.011	-0.050			0.011	-0.049
接する時間					0.008	-0.011	0.005	-0.011
民主的育成←								
母親　フルタイム			0.051	0.041			0.051	0.041
母親　パートタイム			0.016	-0.018			0.016	-0.018
母親　自営業			-0.024	-0.032			-0.024	-0.032
情緒的サポート←								
母親　フルタイム			0.014	-0.037			0.014	-0.037
母親　パートタイム			0.004	-0.002			0.004	-0.002
母親　自営業			0.111	0.052			0.111	0.052
厳格的統制←								
母親　フルタイム			-0.066	0.068			-0.066	0.068
母親　パートタイム			-0.036	-0.040			-0.036	-0.040
母親　自営業			-0.192 †	-0.130			-0.192 †	-0.130
接する時間←								
母親　フルタイム					-0.252 *	-0.268 *	-0.252 *	-0.268 *
母親　パートタイム					-0.212 *	-0.158	-0.212 *	-0.158
母親　自営業					-0.254	-0.300 †	-0.254	-0.300 †

←職業生活充足イメージ

（表3　続き）

	model1		model2		model3		model4	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
社会的に高い地位についている	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
世の中の役に立つ仕事をしている	1.498 ***	1.748 ***	1.392 ***	1.643 ***	1.498 ***	1.745 ***	1.392 ***	1.641 ***
やりがいを感じる仕事をしている	0.972 ***	1.247 ***	0.985 ***	1.271 ***	0.972 ***	1.243 ***	0.985 ***	1.267 ***
←私生活充足イメージ								
結婚している	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
子どもを育てている	0.965 ***	0.961 ***	0.976 ***	0.995 ***	0.966 ***	0.959 ***	0.977 ***	0.993 ***
仕事以外の仲間や友人とも親しくつきあっている	0.391 ***	0.358 ***	0.395 ***	0.368 ***	0.391 ***	0.357 ***	0.395 ***	0.368 ***
←民主的育成								
目標をたてて努力すること			1.000	1.000			1.000	1.000
自分の意見をはっきり言えること			1.457 ***	1.560 ***			1.457 ***	1.560 ***
自立して考えること			1.472 ***	1.493 ***			1.472 ***	1.493 ***
←情緒的サポート								
私のことをよくわかっている			1.000	1.000			1.000	1.000
私にいろいろなことを話してくれる			1.150 ***	1.187 ***			1.150 ***	1.187 ***
私は父や母の仕事についてよく知っている			0.863 ***	0.996 ***			0.863 ***	0.997 ***
←厳格的統制								
私に対して厳しくないほうだ			1.000	1.000			1.000	1.000
私のことを扱いにくいと感じていない			0.431 ***	0.318 ***			0.431 ***	0.318 ***
私の勉強や成績についてうるさく言わないほうだ			0.949 ***	0.890 ***			0.949 ***	0.888 ***
RMSEA	0.063		0.039		0.058		0.038	
CFI	0.915		0.919		0.913		0.917	
TLI	0.871		0.901		0.870		0.898	

注：*** $p < .001$　** $p < .01$　* $p < .05$　† $p < .10$　（両側検定）

同じ分析を男女別に行った結果が表3である。model1から，職業生活充足イメージに対する母親の就業の効果は，女子に対してのみであることがわかった。パートタイム・自営業の母親をもつと，専業主婦の母親をもつ女子に比べて，職業生活充足イメージが低い傾向があることがわかった。

また，私生活充足イメージに対する母親の就業の効果は，男子に対してのみであることがわかった。フルタイム・パートタイムの母親をもつと，専業主婦の母親を持つ男子に比べて，私生活充足イメージが低い傾向があることがわかった。

養育行動を投入したmodel2から，男女ともに，職業生活充足イメージに対しても，私生活充足イメージに対しても，情緒的サポートは有意に正の効果をもつことが示された。男女ともに，私生活充足イメージの方の係数が大きく，特に男子の私生活充足イメージは，0.563という値から，強い影響をもつことがわかった。

接する時間を投入したmodel3から，女子の職業生活充足イメージに対して，接する時間が5％水準で有意に正の効果をもつことがわかった。この結果は，全体の時にはみられなかったものである。

すべての変数を投入したmodel4から，男女ともにmodel1からmodel3までの結果とほとんど変わらないことが示された。

以上の結果から，①職業生活充足イメージに対する母親の就業の効果は，女子においてのみ存在する，②私生活充足イメージに対する母親の就業の効果は，男子においてのみ存在する，③情緒的サポートが子どもの意識に与える効果は，男女別でみてもそれぞれ強く，特に男子の私生活充足イメージに対して強い，④接する時間が，女子の職業生活充足イメージに対して正の効果をもつ，ということがいえる。

6　考察

以上の分析結果が示唆するのは，母親の働き方が子どもの意識へ与える負の影響の存在と，子どもの性別によるその効果と，影響を受ける意識の違いである。

全体でみたとき，model1からmodel4まで一貫して，職業生活充足イメージにはパートタイムが，私生活充足イメージにはフルタイムが，有意に負の効果をもっていた。職業生活充足イメージへの自営業の効果は例外ではあるが，母親の就業の効果は養育行動や，接する時間を媒介することなく，直接的に子どもの意識にそれぞれネガティブな影響を与えるといえる。母親の就業は，子どもに対してポジティブな影響を与えるという指摘もあるが（末盛 2005），今回の分析結果からは負の効果のみが見出された。これは，命題1で述べた役割過重仮説からの予測と整合的といえる。

また，男女別でみたとき，全体でみたときに現れた母親の働き方の効果が男女でくっきりとわかれる。職業生活充足イメージについては女子のみが，私生活充足イメージは男子のみが有意な負の効果をもつことが示された。これらの結果が示唆するのは，むしろ男女による母親のロールモデルとしての効果の違いを強調すべきということではなかろうか。

まず，女子にとっては，母親が「働くこと」についてのロールモデルとなっていることが示唆される。今回使用した職業生活充足イメージは，40歳の時に「社会的に高い地位についている」「世の中

の役に立つ仕事をしている」「やりがいを感じる仕事をしている」といった，外で行う仕事を40代までしっかりとこなしている印象をもつものである。しかしながら，未だに家庭の多くの事を担うのは女性である。そのため，パートタイム（パート・アルバイト／契約社員／嘱託／派遣社員）といった，ある程度家庭と兼ね合いをとりながら働く母親をもつことは，女子にとって40代まで仕事をしっかりと行っているような想像を抱かせにくくしていることが考えられる。また，自営業（自営業主／家族従事者／家庭での内職など）についても，家庭で働く場面が多いことが推測され，外に出て働くというような想像を抱かせにくくしている可能性がある。また，比較対象である専業主婦の母親は，家庭に残ってはいるものの，子どもの教育達成や地位達成に熱心であると仮定すると，パートタイムや自営業の母親よりも，子どもを外で働かせるというインセンティブをもたせやすくしているかもしれない。

男子にとっては，母親が「家庭もつこと」についてのロールモデルとなっていることが示唆される。今回使用した私生活充足イメージは，40歳の時に「結婚している」「子どもを育てている」「仕事以外の仲間や友人とも親しく付き合っている」というものである。母親が，フルタイム（正規の職員・従業員／会社・団体等の役員）やパートタイムとして，外で働くことが，男子にとっては家庭をもつことについての明るいイメージを抱きにくくさせうる。

情緒的サポートが職業生活充足イメージに対しても，私生活充足イメージの子どもの意識に対しても，有意に正の効果もつことがわかった。母親が子どもと接し，子どものよき理解者として情緒的なサポートを行うことは，仕事や家庭のいずれについても，未来へポジティブな想像を抱かせうるようだ。

また，接する時間は女子の職業生活充足イメージに対して有意に正の効果があることがわかった。接する時間の具体的な中身は今回の分析で測ることはできないが，子どもと接する時間をもつほうが，女子の職業生活充足イメージの意識をポジティブに社会化しうるという解釈ができる。この点からも，家庭で家事や子育てに従事し，子どもと過ごす時間を多くもつ専業主婦が，女子の地位達成の意識の社会化について，最も有利な立場にあるといえるかもしれない。

7　おわりに

本稿の目的は，母親の就業が子どもの意識に与える影響を実証的に検証することであった。良質な全国規模の社会調査データの分析から，母親の就業選択や，養育行動，子どもとの接触時間によって子どもの意識へといかなる効果がみられるのか，検討した。また，男女による影響の違いをみるために，男女別での分析を行なった。

分析により，役割過重仮説の妥当性が示唆された。母親が就業するほうが，どちらかといえば将来の生活イメージは積極的なものでなくなる。ただし，それは子どもとの接触時間や養育行動などで媒介されるものとは言えなかった。

また，子どもの性別による，母親の就業の効果の違いから，母親のロールモデルとしての存在がうかがえた。すなわち，女子にとって，40歳の時に「仕事に一生懸命励んでいるかどうか」という予

測は，職をもちながらも，家庭での仕事を長い時間こなすことが多い，パートタイムや自営業の母親をロールモデルとして，低くなることが見い出された。また，男子にとって，40歳の時に「家庭をもち，私生活が充実しているかどうか」という予測は，外に働きにでる，フルタイムやパートタイムの母親をロールモデルとして，低くなることがわかった。性別によって影響のある意識は異なるものの，母親は子どものライフコースの予測において重要な存在であることが示唆される。

また，母親の就業以外に注目すべきは，母親の情緒的サポートの有効性である。子どもの性別や，意識の種類の違いに関わらず，母親の情緒的サポートは強い正の効果をもっていた。情緒的サポートの効果については，先行研究においても自主性（長津 1982）や独立心（末盛 2005）を有意に高めることが確認されている。

以上を総合すると，ロールモデルとしての観察対象の母親は，子どもの意識に負の効果をもたらすが，母親の養育行動それ自体は子どもの意識に正の効果をもたらす，ということが考えられる。ロールモデルとしての子どもへの関与の仕方を，母親自身の意識や行動を変えることによって行うのは難しいが，情緒的サポートを子どもに行うことは，母親の心がけ次第で可能な関与である。

また，女子の職業生活充足イメージについては接する時間が正の効果をもっていた。接する時間は，母親が働いていると，専業主婦の母親よりも短くなる傾向があった。今回の分析結果からは，子どもと接する時間は，女子の職業生活充足イメージに対してのみ効果があるといえるにとどまった。しかしながら，そもそも母親と子どもが関わる時間をもたなければ，親子間の良好な関係は築けない。

母親が働くと子どもに悪い影響がある，という考えは，多くの研究による実証的反証の蓄積によって覆されてきた。しかしながら，本稿のような負の効果を示す分析結果もある。一概に負の効果がないとは言い切るのには注意が必要である。たしかに，母親が働くことは子どもに対して何らかの良い効果をもたらしたり，まったく効果をもたらさなかったりすることもある。しかし，それらは一面的な結果である可能性もあり，どこかの面では，何らかの負の効果をもつこともある。

女性の就業が促される現在，家庭や子どもを持ちながら働く女性が今後も増加することが予想される。そのなかで，子どもに負の効果をもつことがあるのなら，問題として取り上げられる必要がある。

最後に本稿の限界を述べる。本稿では，養育行動と接する時間を媒介要因として考えた。情緒的サポートが子どもの意識に影響を与えることや，母親の就業が接する時間を減少させることは分かったが，母親の就業それ自体の効果は残り，その中身が実証的に説明できていない。男女別の母親ロールモデル仮説は，あくまで今回の分析結果から考えられる帰納的推論に留まる。今後，なぜ母親の就業が子どもの意識に負の影響を与え，男女差が現れるのかを突き止める必要がある。女性の就業が促される現在，今後もこの分野の研究の蓄積が期待される。

【謝辞】

本稿での二次分析にあたって，東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「親と子の生活意識に関する調査，2011」（内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室）の個票データの提供を受けました。記して感謝申し上げます。

【注】

1）　父親不在の欠損データによるケース数の大幅な欠落を防ぐため，「母親の年齢」「父親の年齢」「母親の教育年数」「父親の教育年数」「収入」については，欠損に平均値を割り当てた。なお，構造方程式モデルでの分析においては，欠損を代入したものについてはフラグをあらわすダミー変数を作成し，投入している。

2）　この3つの顕在変数は，もとの調査票では「私に対して厳しいほうだ」「私のことを扱いにくいと感じている」「私の勉強や成績についてうるさく言うほうだ」というワーディングになっているが，ここでは反転して使用したため，表記を書き換えている。

【文献】

Cooksey, E. C., Menaghan, E. C., and Jekieles, S. M., 1997, “Life-Course Effects of Work and Family Circumstances on Children,” *Social Forces,* 76(2): 637-667.

原ひろ子編，1987，『母親の就労と家庭生活の変動』弘文社 .

樋口恵子，1984，『共働き世帯の子育て―共働きは非行の温床か―』フレーベル館 .

Hochschild, A., 1997, *The Time Bind: When Work Becomes Home and Home Becomes Work*, New York: Metropolitan.（=2012，坂口緑・中野聡子・両角道代訳『タイム・バインド　働く母親のワークライフバランス―仕事・家庭・子どもをめぐる真実』明石書店 .）

兵庫県家庭問題研究所，1986，『共働き家庭における母親と子どもに関する調査研究報告書』兵庫県家庭問題研究所 .

Kawaguchi, D. and J. Miyazaki, 2009, “Working mother’s and son’s preferences regarding female labor supply: direct evidence form stated preferences,” *Journal of Population Economics,* 22: 115-130.

長津美代子，1982，「母親の就労が子どもの自主性発達に及ぼす影響」『ソシオロジ』26(3)：63-80.

長津美代子，1990，「母親の就業の有無別にみた5歳児の発達課題の達成度」『日本家政学会誌』41(3)：5-13.

菅万理，2009，「母親の就労が思春期の子どもの行動・学業に及ぼす効果：Propensity Score Matching による検証」『東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ』28: 1-20.

末盛慶，2002，「母親の就業は子どもに影響を及ぼすのか―職業経歴による差異―」『家族社会学研究』13(2)：103-112.

末盛慶，2005，「母親の就業状態が子どもに与える影響―先行研究の概観と今後の展望―」『日本福祉大学社会福祉論集』112: 117-132.

菅原真理子，1991，「共働き家庭のライフスタイル」『日本労働研究雑誌』381: 25-38.

Tanaka, R., 2008, “The gender-asymmetric effects of working mothers on children’s education: evidence from Japan,” *Journal of the Japanese and International Economies*, 22: 586-604.

吉本敏子・東珠実・鈴木真由子・村尾勇之，1996，「女性の就労と児童発達：母親の就労が子どもの成績に及ぼす影響」『三重大学教育学部研究紀要』47：89-97

要田洋江，1982，「家族関係と幼児の情動特性との関連について―共働きの母親群と専業主婦群との比較」『大阪市立大学生活科学部紀要』30: 317-329.

The Examination about the Effect of Mother's Employment Status on Attitudes of Child Revisited

Satoshi MIWA
(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)
Yuki AOYAMA
(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

The purpose of this paper is to examine the effect of mother's employment status on attitude of their child. In concrete terms, the expectation of occupational life and the expectation of personal life are used as dependent variables in our empirical analysis. We use a national representative mother-and-child pair dataset and adopt structural equation modeling as analytical method. We examine not only the impact of mother's employment status on attitude of child, but the mediation effects due to upbringing and/or time of contacts with child.

As a result, several findings are shown as follows: (1) to find the negative effect of mother's employment on the attitude of child; (2) to show that mother's employment affects the expectation of occupational life among female students; (3) to show that mother's employment affects the expectation of personal life among male students; (4) to find the effect of emotional support on attitude of child is largest among upbringing behaviors; and (5) to show that time of contact with child affects the expectation of occupational life among female students.

From these, we conclude that mother should be role model for female students and could enhance the expectation of future life by emotional support and time of contacts with child.

Key Words：mother's employment status, attitude of child, role overloaded hypothesis